

「これどうぞ」と、山田梨佐さんから手渡されたのは、一冊のブックレットだった。山田さんは、昨年暮れ九十二歳で急逝した渡辺京二さんの娘さん。渡辺さんが亡くなつてひと月以上経った二月半ば、ご自宅の居間でのことだった。

表紙には「夢と一生 渡辺京二、下の方に「河合ブックレット」とあった。予備校河合塾を母体とした河合文化教育研究所（略称文教研）による刊行である。

そこで思い出した。

私が渡辺さんと初めてお会いしたのは、昭和から平成に変わる前後だった。当時は熊日の文化部記者として、新聞に載せる石牟礼道子さんの原稿を担当していた。その縁で、石牟礼さんの仕事を支える渡辺さんを知ることになった。すでに著書「北一輝」で毎日出版文化賞を受賞している近代史家として知る人ぞ知る存在だったのだ

が、何しろ厳しくて怖い人、という評判は聞いていた。

そのころ、すでに福岡の河合塾に週2、3回通っておられた。現代文を教えていて、「私のメシの種類」と聞かされたことがある。けれども一方で、反アカデミズム、在野の立場で執筆を続ける孤高の姿と、社会システムに組み込まれた大学に進む受験生を相手にする姿との間には、私の中では落差があり違和感もあった。

けれども今回、この文教研が受験予備校とはかなりかけ離れたものであることを知った。

同書の解説を、インタビュールた加藤万里さんが書いています。

「文教研は」奇妙な研究所だといえる。母体は予備校の河合塾だが、予備校という受験産業を彷彿とさせるものはここには何も無い。とにかく何をやるにも何を批判するのにも全く自由で、全員が形になら

ないような夢だけを追っているような研究所だった」

そのブックレットは、加藤さんが昨年七月、熊本の自宅に渡辺さんを訪ね、インタビュールしたものをまとめた。ご本人の半生（今となってはほとんど一生）、とくに戦後の共産党との関わりが深く語られている。教壇を下りた渡辺さんは二〇〇六年からは文教研特別研究員、一三年からは主任研究員として最後まで関わり続けた。河合塾という民間機関の懐の深さを思う。

そのブックレットもこの四十二号が最終刊だそうだ。三十数年間、吉本隆明、小田実、中村哲、阿部謹也など権力とは離れて位置する、そうとうたる人たちが登場した四十二冊。その最後が渡辺さんだったとは。奥付けは「2023年2月10日発行」。没して四十七日後だった。

（公益財団法人島田美術館長、

元熊日記者）